

ニークな二大思想家を医学的な観点からもその視野にとらえた点で、大きく評価できる。著者は昌益研究の有数の権威者であり、会員諸氏に一読をおすすめする次第である。

(吉元昭治)

(甲陽書房、東京都千代田区神保町二一〇、電話〇三三三二六  
一―二二六〇、平成四年十月刊、四六判、三〇八頁、定価三八  
六三円)

### 高崎斐子他編『明治天皇の侍医 池田謙齋』

一

日本医学史学における一つの目的は、学術それ自体の生成発展や影響関係を究明する事、それに関わる人物の日常生活や、思想と技術の確立に至る生涯、地域的展開を背景にした師弟関係を明らかにする事等であろう。幕末維新期の欧米諸国からの学術の導入と定着の観点から、この変革期を生きた医学関係者の自伝や評伝が意義深い所以である。

本書の意義は、謙齋のベルリン留学中の五年余(明治三年二月―同九年五月)の間、留守宅におきた長男誕生と実兄・義父・妻の死去とに揺れる書状内容や、謙齋がうけた文化衝撃とその文化変容、および、謙齋『回顧録』に見える医学修業期の姿、にあり、長与専齋、石黒忠憲等に比して、声高に語られなかった生涯の自覚を聞き取ることは評伝に関心をもつ者の喜びである。本書の構成の標題(筆者)を示せば、次の通

りである。

家譜・口絵(池田謙齋・入沢家・入沢家両親・謙齋家族・辞令)序文(大鳥蘭三郎・酒井シツ)、プロイセンよりの書簡(池田謙齋)、池田謙齋あて各氏書簡(石黒忠憲・岩倉具視・大山巖・加藤弘之・桂太郎・木戸孝九・品川弥二郎・杉孫七郎・高木兼寛・外山正一・中江篤介・長与専齋・長谷川泰・浜尾新・土方久元・福地源一郎・松本珪太郎・三宅秀・山泉有朋)、回顧録(池田謙齋)、謙齋池田先生墓碑銘(入沢達吉)、池田男爵招魂碑(吉原義雄)、父謙齋の思い出(高崎斐子)、筆のまにまに(高崎斐子)、久子物語(入沢達吉)、池田謙齋一(堀江健也)、池田謙齋伝補遺(長門谷洋治)、『明治天皇記』のなかの池田謙齋、跋文(池田允彦・安部恭子)、池田謙齋年譜。

二

謙齋生涯の概略は本書収録の堀江健也、長門谷洋治両氏の記事によって理解される。謙齋本人の『回顧録』は明治三四年、六一歳時の口述筆記に基づき、大正六年、喜寿の祝いで親戚に印刷頒布した(入沢達吉識語)が、十五年後の印刷に際し訂正もせず、回顧録特有の記憶違いの箇所も残っている。内容は前半生の医学修業時代に止り、医学教育、医療、侍医、軍医などの明治期の諸制度確立過程に関わる記述は少ない。本稿では人間的側面に焦点をあて、『回顧録』と「プロイセンよりの書簡」について紹介したい。

『回顧録』の発端の出自と修業過程では、尊皇攘夷というその時代特有の若者の思想と行動とが示されて興味深い。例え

ば洪沢栄一も自伝『雨夜譚』で、幕末の騒然たる世情を目撃して近在の友人と時事を慷慨し、ついに文久三年、居所の武蔵国血洗島を出て、尊皇攘夷の旗揚げ計画を練るに至った事をいう。因みにこの血洗島村の知行主は武蔵岡部に拠った安部氏で、維新後、謙齋次男の次郎がこの安部信順の養子に入っている。

謙齋の『回顧録』は長与専齋、石黒忠憲など幕末維新期の洋学者のそれに較べると、あまり声高に話してはくれない。口述内容はベルリン大学留学時代で終っているが、見るべき内容は新潟から出て江戸・長崎での修業記事にある。幕末の蘭学修業者に共通した所は既に専齋の自伝『松香私志』で知られるが、幕府医学所に入學した謙齋もその例外ではない。緒方洪庵逝去後の医学所頭取となった松本良順の教育方針はボンペ直伝とも言うべく、医学所を単に外国語習得の施設にせず、医学中心に自然科学全般を勉学させるものであった。この理念は明治期の医学教育を確立させ、また、外国語教育の意義を近代学校教育制度下の高等教育に定着させるものであった。謙齋が尊皇攘夷思想から敵を知るべく学ばんとした蘭学から、西洋医学専攻に転じた契機は、まさに医学所で学んだ物理学・化学の内容に衝撃を受けたからである。この志向の先が長崎伝習所入學であり、ボンペ流カリキュラムに基づく、次の指導者ボードイン・マンズフェルト・ハラタマ達により、自然科学全般と、医学各論・病院実習の教育を受けたのである（元治元年—慶応四年）。

### 三

次に、ドイツからの書状をとりあげる。収録された書状は明治三年十二月から六年十二月までの二五通である。このうち一部は原本の写真掲載もあり、翻字された活字文と照合でき、この対校可能な書状からみても、原文翻字の読み下し文、振り仮名についてはその原則を凡例に記すべきであったし、誤読などの問題もあるが大意を損なうものではない。ここでは書状を通読した印象として、特に文化衝撃と文化変容について記しておきたい。

謙齋が米・英・和蘭を経てベルリンに到着したのは、普仏戦争後、ドイツ帝国が成立した時点だったので、ベルリンを観察してプロシヤ勝利の原因を学問にあるとし、その上で「和蘭は真に西洋中の田舎」と言い、蘭学培養の西洋認識から訣別する心境を吐露した。他方、それは日本の封建制批判を促し、国家意識を鮮明にさせている。侍を「バクトの親玉」とし、身分制否定論を展開する。謙齋の封建批判の方向と見識を示すものは女性論である。ベルリンの女子の学問に比較言及し、「日本に生れ候女は因果に御座候（中略）男も人老人、女も人老人、高下の差別」は無く、「唯々学問いたし候と致さずとにこれ有り（中略）右様のことは唯今日本の風俗に向き申さず候」といい、女性の独立した人格と男女平等を指摘し、学問の力を説く。女子教育機関、課程内容と学習年齢を記し、特に二十七・八歳の女子の通学に着目し、「実に恐ろしき様」で、「大体の男は迎も相叶ひ申さず候」という。

これにより「此地の風俗を見受けるより始めて発明」した体験から、「たとへ男たりとも女たりとも同じ人間に候」という認識に至り、「女ならば西洋に生れ候事に御座候」と結論づけたのである。これは謙齋が到達した人間観、すなわち近代的思想形成という文化変容を示すものであろう。これが帰国後の思想形成にどのように働いたのか、これからの検証すべき一観点である。

現在、酒井シヅ教授の下に池田文書研究会が結成され、私も末席の一員として謙齋宛諸家書状を翻字しているが、上記の人間の側面もさりながら、軍医・侍医・大学行政上の頭官歴任と人事管掌、同経歴の医学系官僚との相違点、患者との関係などに収斂するような諸問題を通じ、総じて医師のもつカリスマ性の形成過程が見られるのではないかと思っている。

(岩崎 鐵志)

(発行人・高崎斐子、安部恭子、安部信愛、札幌市中央区北七条西十九丁目、電話〇一一一六二一一〇八六九、一九九一年七月刊、B五判、二〇八頁、定価五一五〇円)

### 山本厚子著「野口英世 知られざる軌跡」

細菌学者野口英世に関する著述は、生存中の野口をして「こんな出鱈目を」と嘆かさせた「発見野口英世」(大正四年)以来その数を確め得ない。戦前は靖国思想に基づく二宮尊徳と共に、神格巨像修身教材にされ、戦後はその反作用で人間

野口像の追究が、梅毒病原体純粹培養、黄熱病原菌発見の誤りから遂には自殺説にまで進展して来た。

著者は、わが国経済援助計画調査団通訳として現地に滞在中、野口の南米・アフリカに於ける黄熱病の取組みと、ロックフェラー財団等の調査に基づき、妻メリーに焦点を当てたもので、メリーの記述は稀少なものである。

第一部はラテンアメリカを駆け巡った国際人のパイオニア。第二部は伝記から抹殺されたメリー・ロレッタ・ダージス。で構成されている。

メキシコについては、野口が当地を訪れた時は二十九歳の医学生で、野口の寝食を忘れ研究に没頭する姿に強く影響を受け、毎日講義も受けたというオトリオ・ビジャヌエバ博士長女よりの聞き取り、「賢者野口英世博士が到着」の標題になる現地新聞記事、ユカタン州立医薬科大学名誉医学外科博士号授与に関する通知案内状と式典の状況等を同大学資料に基づき記載している。

ペルーについては「オロヤ熱病原体バルトネジャ・バシリフォルシスの培養」が記された一九二六年官報、ペルー公衆衛生局長セバスチャン・ロレンテより得た在ニューヨークの野口に宛てたペルーでの講演会要請、オロヤ熱の研究など三通の書簡コピーを含むペルー国立公衆衛生研究所の資料、一九八二年日本国の無償資金援助計画により建設された、国立精神衛生研究所オノリオ・デルガードヒデオ・ノグチの初代所長による、オロヤ熱に並ぶ精神病学上の野口業績、黄熱病